懐徳堂記念祭における儒礼

竹田健二

はじめに

明治四十四年（一九一一）十月五日、懐徳堂記念会は、大阪中之島の大阪公会堂において懐徳堂記念祭を挙行した。同会が後に出版したその活動報告書『懐徳堂記念会会務報告』には、「祭典は儒禮を用ふ」（第三章祭典）と、この祭典は儒礼によって執り行われたと明記されている(1)。

もっとも、祭典に儒礼が採用された経緯や理由については、『懐徳堂記念会会務報告』の中にも、また懐徳堂記念会が大正二年（一九一三）に財団法人化して財団法人懐徳堂記念会となった後、大正十五年（一九二六）に出版した『懐徳堂要覧』等にも、まったく説明がない。加えて、儒礼とされる懐徳堂記念祭の儀礼の具体的な内容については、これまで注目されることがほとんどなかった。

そこで小論では、明治末から盛り上がっていった懐徳堂顕彰運動の発端となった懐徳堂記念祭が、どのような経緯を経て儒礼によって執り行われることになったのか、そしてまた儒礼とされるその儀礼の具体的な内容はどのようなものであったのかという点を中心に、財団法人懐徳堂記念会に保存されていながら従来注目されてこなかった資料を活用しつつ、検討を加えることとする。

一　儒礼採用の経緯

本章では、懐徳堂記念祭が儒礼により挙行されるに至った経緯について検討する。

周知の通り、懐徳堂記念祭挙行の直接の発端は、明治四十三年（一九一〇）一月二十九日に行われた、大阪人文会第二次例会における西村天囚の講演である。「懐徳堂研究其の一　五井蘭洲」と題するこの講演の終了後、

「懐徳堂師儒諸先生の爲に公祭を擧行すべしとの議」（『懐徳堂記念会会務報告』第一章創立（一）発端）が全会一致によって議決された。この議決が後に懐徳堂記念会による懐徳堂記念祭の挙行へと結び付くことになる。

大阪人文会は、当時大阪府立図書館長であった今井貫一を中心として、大阪に関わる人文学の研究に取り組んだ団体であり、明治四十二年（一九〇九）八月に在阪の有志によって設立された。大阪人文会は懐徳堂記念会が発足するまでの間、隔月に開催する例会での協議を中心として、懐徳堂記念祭の準備を精力的に進めていった(2)。

懐徳堂記念祭が儒礼により挙行されることは、大阪人文会が明治四十三年（一九一〇）三月二十二日に開催した第三次例会において決定している。そのことは、財団法人懐徳堂記念会に保存されていた「懐徳堂記念会記録」の以下の記述より確認できる(3)。

三月廿二日大阪人文會第三次例會ニ於テ明年某月ヲ以テ擧行スベキ懐徳堂記念祭ノ準備トシテ決議セル条〻如左

一　祭典ハ儒礼ニヨルコト

一　碩學鴻儒ヲ聘シテ二日間學術講演會ヲ開クコト

一　懐徳堂諸先哲ノ遺著、遺墨、遺物展覧会ヲ開クコト

一　懐徳堂諸先哲ノ遺著ヲ編纂シ記念出版ヲ行フコト

一　規則案ヲ草シ第四次例會ニ於テ協議スルコト

大阪人文会は一月の第二次例会において、明治四十四年に懐徳堂記念祭を挙行するということを決議したが、その具体的な日程を決めるには至っていなかった。二ヵ月後の第三次例会でも日程は未定のままであったが、祭典を儒礼によって執り行うこと、記念祭に併せて二日間の学術講演会を開催すること、懐徳堂の諸先生の遺著や遺墨・遺物などを展示する展覧会を開催すること、更に遺著を編纂して記念出版を行うことを決議したのである。この時議決された事業は、すべて後に懐徳堂記念会の事業として実施された。懐徳堂記念会が発足するのは明治四十三年九月になってからのことだが、その活動の枠組みは、半年前の大阪人文会第三次例会において既に設定されていたのである。

もっとも、大阪人文会が何故記念祭を儒礼で行うこととしたのか、またそのことを議決するに当たってどのような議論があったのかについては、「懐徳堂記念会記録」もまったく触れていない。しかし、懐徳堂の諸学者を祭る祭典の挙行は、則るべき先例がまったく無いものであった。それだけに、その祭典をどのような儀礼をもって執り行うのかは、大阪人文会内部で何がしか議論されたものと思われる。

但し、第三次例会の開催は第二次例会のわずか二ヵ月後であり、またその間に大阪人文会会員が祭典に関して協議する場が設けられた形跡は、今のところ確認できない。このため、第三次例会の議決が、懐徳堂記念祭の「儒礼」の具体的な内容等に関して詳細に検討し、その結果を踏まえて行われたものであった可能性は、低いと見られる。

以下は推測に過ぎないが、第三次例会において「祭典ハ儒礼ニヨル」と定められたのは、懐徳堂はそもそも儒学の学校であり、儒学の先生のための祭典であるからには、仏教や神道などの形式は相応しくないとの、比較的単純な判断からであったと思われる。また、大阪人文会第三次例会が開催される三年前、東京の湯島聖堂において、孔子とその弟子を祭る釈奠が復活していることも、大阪人文会が懐徳堂記念祭を儒礼によって執り行おうと考えたことに影響を与えた可能性が考えられる。

湯島聖堂における釈奠は、元禄四年（一六九一）以降、幕末まで継続して行われていたのだが、明治維新後断絶していた。ところが、明治四十年（一九〇七）四月に、孔子祭典会によって再び挙行された(4)。この湯島聖堂における釈奠の復活は、明治の末からの儒教振興の風潮を象徴する出来事の一つと捉えることができるが、大阪人文会関係者がその動きを意識していた可能性は十分に考えられる。

もちろん、懐徳堂記念祭は釈奠ではない。また、湯島聖堂は江戸時代からの建物がそのまま保存されていたのに対して、江戸時代の懐徳堂の建物はこの時既に失われていた。従って、この二つの祭典の性格には異なるところが少なくないが、大坂学問所・懐徳堂は、中井竹山・履軒の時代に昌平坂学問所をも凌ぐ勢いを有していたとされる。そこで大阪人文会は、湯島聖堂において釈奠が復活したことを強く意識して、懐徳堂記念祭を湯島聖堂の釈奠と同様に儒礼によって挙行しようとしたとの可能性が考えられるのである(5)。

以上本章では、懐徳堂記念祭が儒礼で挙行されるに至った経緯について検討した。次章では、その懐徳堂記念祭における儒礼の具体的な内容について考察する。

二　懐徳堂記念祭における儒礼の内容

懐徳堂記念祭の「儒礼」について、『懐徳堂記念会会務報告』には、「其細節は釋奠及び先儒の所定に稽へて大體を酌定し、猶拘古奇異の觀を避けんが爲め、舗設服飾等近世若くは今代の禮俗に從へるもの尠からず」と述べられている。すなわち、踏襲すべき先例が無かった懐徳堂記念祭の儀礼は、釈奠の儀礼などを参考にしてその概略が定められたのである。もっとも、「近世若くは今代の禮俗に從へるもの尠からず」と述べられていることは、その儀礼が基本的には挙行に際して新たに作られたものであり、そしてそのことを懐徳堂記念会自身も認識

していたということを示していると考えられる。

それでは、懐徳堂記念祭の儀礼は、具体的にはどのような内容だったのであろうか。『懐徳堂記念会会務報告』の記述と当時の大阪朝日新聞の記述とに基づいて、施設の設営と儀式の次第とに分けて見てみよう。

先ず施設であるが、懐徳堂記念祭を行う施設には大阪公会堂が選ばれた。大阪公会堂は、明治三十六年（一九〇三）三月、第五回内国勧業博覧会協賛会の事業の一環として建設された、洋風の木造二階建ての建物である。先にも触れた通り、明治四十四年には、江戸時代の懐徳堂の建物は既に残っておらず、懐徳堂にちなむ施設での挙行は不可能であった。また懐徳堂記念会の最終的な会員数は、名誉会員は十四名、特別会員は六百二十二名、普通会員は千三百七十名に及んだ。このため、おそらく当時大阪で最も収容人数の多い施設であったと見られる中之島公会堂が会場に選ばれたのであろう(6)。

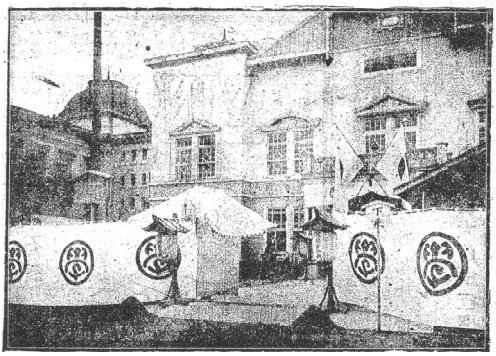
懐徳堂記念祭會場（中之島公會堂）

写真１　懐徳堂記念祭会場

明治四十四年十月五日付の大阪朝日新聞に掲載された写真（写真１）によれば、会場となった大阪市公会堂の敷地の外壁や会場の建物内には、懐徳堂の瓦当の紋様を染めた幔幕が張り巡らされた。また門と玄関との前には、それぞれ対になった台提灯が据えられ、更に門前の提灯の手前に盛砂、そして門に向かって左手には式の次第を記した高札、右手には車馬の乗り入れを禁ずる「下乗」の高札が設けられた。こうした設営は、全体としてかなり日本風である。同日付の大阪朝日新聞の記事にも、「何事にも刻々に欧風化しつつある大阪に滅多に見る能わざる純日本式の昔を偲ぶ典雅限りなき懐徳堂記念大祭」と、日本式の典雅な祭典であったと述べられている。儒礼とはいえ、決して中国式ではなかったのである。

公会堂の建物の中は、公会堂の奥中央に南面する形で祭壇が設けられた。そして場内の座席は、遺族及び門故老席、来賓席、役員席、会員席、一般参拝人席に区画されていた。

祭壇上には神壇が設けられた。神壇は檜で作られ、高さ一尺（約三〇センチ）、幅一間（約一・八メートル）、奥行き二尺五寸（約七五センチ）である。神壇の上面は白布で覆われ、その上に後述する神位が据えられた。神壇の背面には金屏風が立てられ、また祭壇の上方に、懐徳堂の初代学主・三宅石庵の手になる「懐徳堂」の扁額

が掛けられた。

続いて、懐徳堂記念祭の次第を見てみよう。

祭典は、明治四十四年十月五日午前九時に始まった。かつて懐徳堂で用いられていた木司令を用いて第一令が打ち鳴らされると、場内に参集した参会者一同は着席した。第二令によって雅楽の演奏が始まり、懐徳堂の旧門人である木積一路と藤鹿之助とが前に進み出た(7)。祭典の開始まで、祭壇上の神壇は、上から垂らされた帷帳によって場内からは見えなかったが、二人が帷帳を静かに引き上げると、神壇とその上に据えられた神位が姿を現した。神位は檜で作られており、高さ四尺（約一二〇センチ）、幅二尺五寸（約七五センチ）、厚さ一尺（約三〇センチ）であった。神位の中央には「懐徳堂師儒諸先生之霊」と墨書され、両側に三宅石庵以下懐徳堂ゆかりの学者の名が記されていた(8)。懐徳堂記念祭当日の大阪朝日新聞の記事によれば、それは懐徳堂学主を代々勤めた中井家の子孫・中井木菟麻呂の筆によるものであった。神位が姿を現すと、参会者一同は起立して拝礼し、続いて献饌が行われた。

第三令の後、懐徳堂記念会の会頭である住友吉左衛門が祭文を朗読した（写真2）。住友吉左衛門に続いて、遺族総代の中井木菟麻呂、文部大臣・長谷場純孝の代理である文部参事官の黒澤久次、大阪府知事の犬塚勝太郎、大阪市長の植村俊平が祭文を朗読した。

第四令と共に再び雅楽が演奏され、その中を山階宮の使者を先頭に、主な参会者が拝礼を行った(9)。その順序は、祭文を朗読した住友吉左衛門、中井木菟麻呂、黒澤久次、犬塚勝太郎、植村俊平、そして懐徳堂記念会名誉会員総代として菊池大麓、記念講演会講師総代として星野恒、武官総代として第四師団長の一戸兵衛、文官総代として大阪控訴院長の古荘一雄、懐徳堂記念会副会頭の小山健三、門人総代として伊藤介夫、懐徳堂記念会委員総代として西村時彦（天囚）である。

拝礼の終了とともに第五令があり、懐徳堂記念会会頭の住友吉左衛門が祭壇の右側に立ち、参会者に向けて挨拶を述べ、続いて懐徳堂記念会委員長西村時彦が、懐徳堂記念会の活動経過の報告を行った。その後第六令が鳴ると、懐徳堂記念会の会員が順次拝礼を行った。これをもって懐徳堂記念祭の式典は終了し、正午に参会者一同は退場した。

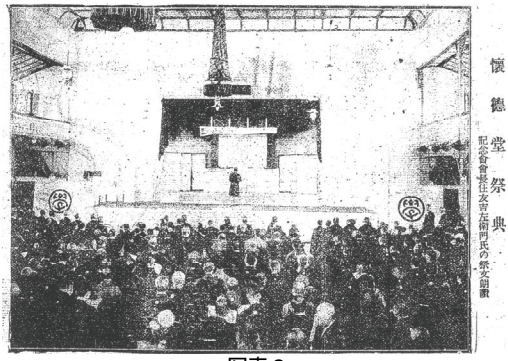

写真2
（明治四十四年十月六日付大阪朝日新聞）

以上、懐徳堂記念祭の会場設営及び儀礼の内容を確認した。注目される点は、洋風建築である中之島公会堂に、幔幕・提灯・高札といった設営がなされ、全体として「純日本式」とまで表現されるほど日本風な儀礼であったという点である。こうした設営や儀礼からは、懐徳堂記念会が中国的なものを志向していたわけではなく、日本における伝統的な風習を尊重する姿勢を有していたことがよく窺える。また、『懐徳堂記念会会務報告』によれば、懐徳堂記念会には「拘古奇異の觀を避けん」との意識があった。このことは、伝統を尊重はするとはいっても、復古的ではなかったことが分かる。懐徳堂記念会は、近代日本に適した、新しい日本における儒礼の創設を目指していたと見てよかろう（10）。

この新たに作られた儀礼全体が儒礼によるものであることを明確に示していたのは、祭壇上に神位が据えられ、それに向けて祭文朗読や拝礼、献饌が行われたことであった。神位に対する祭文朗読や拝礼・献饌こそ、懐徳堂記念祭における儀礼の根幹だったと考えられる（11）。

以上本章では、懐徳堂記念祭における儒礼の具体的な内容について検討した。懐徳堂記念祭がこうした儒礼の形式で行われたことは、当然懐徳堂記念祭そのものの目的と関係があると推測される。そこで次章では、懐徳堂記念祭の挙行自体の目的について考察する。

三　懐徳堂記念祭の目的と儒礼

懐徳堂記念会が懐徳堂記念祭挙行の目的について公的に表明した最初のものは、設立直後の明治四十三年十月五日、大阪朝日・大阪毎日・大阪時事・大阪新報・大阪日報の五紙に掲載された「懐徳堂記念会趣旨」である。懐徳堂記念会はこの「懐徳堂記念会趣旨」の発表により、広く大阪市民に向けて会の成立を宣言し、同時に市民に対して入会を促した。

「懐徳堂記念会趣旨」は、先ずその冒頭で懐徳堂の歴史の概略を述べ、続けて今日大阪が繁栄しているのは、懐徳堂が百四十年あまりもの間「大阪唯一の學校として、大阪の文教を主」り、「大阪人を教育して其の品性を養ひ、其風俗を正し、以て世道人心を維持」したことによるところが大きいとする。そして、「顧ふに天地の在らん限り、人類幸福の基礎は道德に在り、國家の隆昌も、社會の平和も、家庭の安樂も、皆此に根柢す、而して商業上道德の尚ぶ可きは、固より言を待たず」と、道德の重要性を強調し、その末尾を次のように結んでいる。

古來の教化の効、能く盛を今日に致せる大阪が、亦能く繁榮を將來に獲んと欲せば、一たび其頭を回して源に溯り故を温ねんことを要す、則ち我が大阪人が今古に俯仰して、自ら省み、自ら戒むるに適當なるは、懐德堂の歴史に若くなし、是れ懐德堂記念祭

の擧ある所以なり、日を明治四十四年十月五日（十月五日は幕府の官許を得て講を開きたる記念日なり）にトし、祭壇を中之島公會堂に設けて、三宅五井中井並河諸先生の靈を祭り、且つ碩學を聘して講演を開き、遺書を刊行し、遺墨を展覧し、以て一は百四十餘年教化の恩に報い、一は世道人心の振興に資する所あらんとす、此に其の趣旨を明にし、伏て大方諸君の賛成を請ふ、

すなわち、「懐徳堂記念会趣旨」においては、懐徳堂記念祭挙行の目的は「一は百四十餘年教化の恩に報い、一は世道人心の振興に資する所あらんとす」ること、換言すれば、懐徳堂の顕彰と社会道徳の向上に役立つことが、その目的とされていたのである。

注目されるのは、目的の中の「世道人心の振興」に役立つとする部分についてである。「懐徳堂記念会趣旨」では、目的の一つとして「世道人心の振興」に役立つということは明記されていたが、それは儒教とは直接結びつけられていない。ところが、後に懐徳堂記念祭挙行の目的であるこの「世道人心」の向上が、儒教の振興と強く結びつけて説かれるようになる。

財団法人懐徳堂記念会が設立された大正二年（一九一三）十月、懐徳堂記念会は余剰金六千円余りを含む会の資産をすべて財団法人懐徳堂記念会に引き継ぎ、活動報告書『懐徳堂記念会会務報告』を刊行してその活動を終結した。その『懐徳堂記念会会務報告』においても、懐徳堂記念祭の挙行の目的がやはり道徳の向上を含む形で述べられているのだが、その「第一章　創立（一）發端」の前半では、以下のように、その道徳の向上は儒教によって行われなければならないとされている。

方今學術勃興し、教化普及して、文運の盛なる、前古比なし、然れども一世の風尚、動もすれば智育に偏して、德育は踐履に疎なる者あり、以て巧詐漸く長じて風俗漸く薄きを致し、破倫敗德の行は閭巷に續出し、世道人心の汚下、將に底止する所を知らざらんとす、識者の深慨太息する所以なり、嘗て窃に以謂らく、我が國民道德の大本は、萬邦に卓絶せる國體に在りて、古來其の大本を培養せし所以の者は、國體と一致せる儒教の倫理綱常と爲す、是れ　列聖教化の淵源にして、其の人心に入ること久しく且つ深し、畏くも　今上の國民に諭したまひし教育の勅語のごとき、國體に根據して儒教に原本し、字々句々、經籍に胚胎するは、蓋し此が爲なり、然るに維新以來、風氣の開發に急にして、新學新説を尚び、儒教は殆んど忘られたるが如くなりし餘風、延きて今日に至る、國民道德の大本を養ふ所以の者は、之を措きて問はざるの傾向に陥れり、德育の効果を奏し難きも亦宜ならずや、伏して惟みるに、維新五誓の一に、廣く智識を世界に求むと宣らせられ、

教育勅語の道德に關する大旨は、國體と儒教とに根原せるは、實に學問教化の大方針と謂ふべく、國民たるもの、一面には鋭意新學新説を攝取して、智識を世界に求め、一面には國民道德の大本を養ふに、其淵源する所を忘れず、以て心形並に文明の域に躋らんことを要す、本會は此の見解を以て、儒教の倫理綱常を講明して以て世道人心の汚下を挽救せんと欲す、

『懷德堂記念会会務報告』は、今日の社会は「學術勃興し、教化普及して、文運の盛なる、前古比なし」という喜ばしい状況ではあるが、一方では德育が軽視された結果、「世道人心の汚下」が著しいと指摘する。そして、日本国民の道德の根本は「萬邦に卓絶せる國體」にあり、国民の道德の根本を培ってきたのは「國體と一致せる儒教の倫理綱常」であるとの認識を示し、教育勅語が「國體に根據して儒教に原本し」、その字句が儒教の経典によるのはそのためであると述べる。

その上で、明治維新以来「風氣の開發に急にして、新學新説を尚び、儒教は殆んど忘られたるが如」き状況が今日まで続いているが、「廣く智識を世界に求むと宣らせられ」た五箇条の御誓文と教育勅語とは、「學問教化の大方針」であって両立されるべきものであるとし、「本會は此の見解を以て、儒教の倫理綱常を講明して以て世道人心の汚下を挽救せんと欲す」ものであると述べる。つまり、懐德堂記念会は、儒教倫理の根本を明らかにし、それによって社会道德の向上を実現することを目指したというのである。

「懐德堂記念会趣旨」においても、「世道人心の振興」ということは懐德堂記念会の活動の目的として説かれていた。しかし、会の活動の目的が直接儒教と結び付けられることはなかった。ところが、『懐德堂記念会会務報告』においては、懐德堂記念会の活動が儒教そのものと結び付けられ、しかもそれが、先に見た「儒教の倫理綱常を講明して以て世道人心の汚下を挽救せんと欲す」との部分の他にも、「況んや世道人心を維持せんとするには、儒教の廢す可からぎる、言を待ざるをや」（「第一章　創立（一）發端」の後半）などと、非常に強い、煽動的な表現となって表れている。

加えて、『懐德堂記念会会務報告』では、「教育勅語の道德に關する大旨は、國體と儒教とに根原」すると、儒教が教育勅語と結び付けられている。教育勅語は「懐德堂記念会趣旨」にはまったく登場しておらず、懐德堂記念会の活動と結び付けられていなかった。

以上のように、明治四十三年（一九一〇）の「懐德堂記念会趣旨」と、三年後の大正二年（一九一三）の『懐德堂記念会会務報告』とを比較すると、『懐德堂記念会会務報告』は儒教重視の姿勢が顕著である。

懐德堂記念会の活動について報道している当時の大阪朝日新聞の記事を見ても、懐德堂記念会の活動を儒教や

教育勅語と結び付ける姿勢は窺えず、その説くところは、「懐徳堂記念会趣旨」と基本的に同一である。従って、懐徳堂記念会の活動と儒教や教育勅語とを直接に結び付け、それらを重視する姿勢は、設立当初の懐徳堂記念会にはもともとさほど強くは備わっていなかったと理解するのが妥当と考えられる。

もちろん、懐徳堂記念祭が儒礼によって執り行われたことから見れば、懐徳堂記念会が「世道人心の振興」を目的とするその活動を、儒教そのものとまったく無関係としていたとは考えられない。とすれば、設立当初の懐徳堂記念会は何らかの意図により、儒教や教育勅語重視の姿勢を敢えて隠したとの可能性が考えられるが、今のところそうであったことを直接裏付ける資料は確認できない。

このため、現時点では、明治四十三・四十四年頃の懐徳堂記念会には、儒教や教育勅語を重視し振興しようとの姿勢はいまだ強くは認められず、そうした姿勢は懐徳堂記念祭が挙行された後になって打ち出されるようになったのであり、懐徳堂記念祭が儒礼によって行われたことに儒教信仰の意図がどの程度込められていたかは判然としない、と指摘するに止めておく。

おわりに

当初は儒教の振興や教育勅語との関わりをさほど主張していなかった懐徳堂記念会が、後にそれを強く主張するようになったのは、おそらく財団法人としての認可申請が影響していると推測される。

『懐徳堂記念会会務報告』が出版されたのは、大正二年八月二十日付で文部大臣より財団法人懐徳堂記念会の設立が許可され、そして同年九月一日に法人登記が終わり、更に懐徳堂記念会から財団法人懐徳堂記念会への引き継ぎが行われた後の、同年十月のことである。懐徳堂記念会関係者が中心となり、文部大臣に対して行われた財団法人設立の申請においては、この新たに設立される団体の目指すところが政府の教育行政の方針と合致しており、団体には公益性があるということを、強くアピールする必要があったと推測される(12)。『懐徳堂記念会会務報告』の記述が、懐徳堂記念会は設立当初から教育勅語などを強く意識しており、政府の教育行政方針に合致する活動を展開しているとの印象を与えるものとなっているのは、そのためであろう。

もっとも、懐徳堂記念会が法人化し、財団法人懐徳堂記念会となった際の経緯や、当時の社会的思潮との関係等については、なお十分には解明されていない面が少なくない(13)。それらの解明については、今後の課題としたい。

注

1　『懐徳堂記念会会務報告』には、出版年月日を明示する奥付はないが、その末尾に「本會會務報告の遷延せしは、上來略述せし徑路を辿りつゝ、今日に及びし次第につき、會員諸氏に於ては其意を諒し、宥恕あらんことを希ふ。／大正二年十月五日殘務委員白す」とある。このため、その出版は大正二年（一九一三）十月五日付であったと見なすのが妥当と思われる。

2　拙稿「大阪人文会と懐徳堂記念会―懐徳堂記念会蔵「経過報告第一」を中心に―」（『中国研究集刊』第四十六号、二〇〇八年六月）参照。

3　前掲拙稿「大阪人文会と懐徳堂記念会」、及び拙稿「資料紹介　懐徳堂記念会蔵「懐徳堂記念会記録」」（『国語教育論叢』第十七号、二〇〇八年二月）参照。なお、「懐徳堂記念会記録」が誰の手によって、またどのような経緯で作成されたのか、何故未完であるのか、といった点は不明であるが、懐徳堂記念会の活動報告書を作成する際の資料として、同会の総務係或いは記録係によって作成されていたものである可能性が考えられる。

4　孔子祭典会は、明治四十年（一九〇七）に結成され、湯島聖堂の大成殿で孔子を祭る孔子祭を年一回行なった団体であり、大正七年（一九一八）、財団法人斯文会に併合された。『孔子祭典会会報第一号』（明治四十年十月三十日発行）によれば、孔子祭典会結成のきっかけは「明治三十九年東京高等師範学校職員中有志ノ者孔子ノ我国ニ於ケル教化ヲ感謝スルノ意ヲ表センガ為ニ其ノ祭典ヲ大成殿ニ於テ挙行センコトヲ企テ」たことである。

5　次章に述べるように、『懐徳堂記念会会務報告』には「祭典は儒禮を用ふ、其細節は釋奠及び先儒の所定に稽へて大體を酌定し、猶拘古奇異の觀を避けんが爲め、舗設服飾等近世若くは今代の禮俗に從へるもの尠からず」と述べられている。このことから明らかなように、懐徳堂記念祭の儀礼は、孔子やその弟子を祭る釈奠の儀礼などを参考にしていた。大阪人文会が懐徳堂記念祭を儒礼によって執行すると議決した時点において、既に釈奠を参考にすることが念頭にあったのであれば、それは三年前に孔子祭典会が行った釈奠だったのではないかと考えられる。なお、明治四十三年一月末の時点において、代々懐徳堂の学主を務めた中井家の子孫である中井木菟麻呂には、孔子祭典会についての明確な認識があった。このことは、明治四十三年一月三十一日付の木菟麻呂の日記『秋霧記』に、木菟麻呂が「孔子祭典会ノ如キ組織」を設けて、「懐徳堂創立記念日ニ先哲ノ年祭ヲ挙行スルコト」を企画していたことから確認できる。もっとも、『秋霧記』の記述を見る限り、木菟麻呂は一月三十一日の時点で、二日前の大阪人文会第二次例会で懐徳堂記念祭の挙行が決議されたことを知らない。拙著『市民大学の誕生―大坂学問所懐徳堂の再興』（大阪大学出版会、二〇一〇年）参照。

6　懐徳堂記念会は、明治四十四年三月にも、中之島公会堂を会場として会員勧誘のための講演会を実施している。前掲拙著『市民大学の誕生』参照。

7　木積一路は、並河寒泉・中井桐園時代の懐徳堂の門人で、助教も務めた藤戸寛斎の改名後の名である。西村天囚『懐徳堂考』下巻、「廃校後の中井氏（附懐徳堂旧門人）」参照。

8　神位に懐徳堂師儒諸先生として記されていたのは、三宅石庵・三輪執斎・伊藤東涯・中井甃庵・並河誠所・井上赤水・五井蘭洲・三宅春楼・中井竹山・中井履軒・中井蕉園・中井碩果・中井桐園・並河寒泉・中井柚園・懐徳堂五同志である。

9　山階宮の使者は、幕末に祖父の山階宮晃親王が懐徳堂を訪問した縁により、この時特に派遣されたものである。

10　孔子祭典会による釈奠の再興の際にも、その儀礼をどのようなものにするのかが問題となった。このことは、前掲『孔子祭典会会報第一号』に、「祭典ノ方法ニツキテハ初メ或ハ釋奠ノ再興ヲ唱道スルモノアリ或ハ質素簡易ノ方法ヲ主張スルモノアリシガ、発起人会ニ於テ祭典ハ本邦神祭ノ儀式ニヨリテ挙行シ、祭器ハ祭官ト相談ノ上可成簠簋籩豆等ヲ使用スベキコトニ決定シタリ」とあることから分かる。なお、孔子祭典会が「祭典ハ本邦神祭ノ儀式ニヨリテ挙行」することとしたのは、「抑徳川時代ニ於ケル釋奠ハ殆我国神祭式ニ一致セルガ故ニ今回挙行ノ神祭式ハ之ヲ釋奠ニ比シテ唯祭酒飲福ノ儀ヲ欠クノミナリ」（同）との認識に基づいたためである。孔子祭典会の釈奠は、基本的に江戸時代の釈奠の復活を目指したと見なすことができる。

11　このことは、後に財団法人懐徳堂記念会は重建懐徳堂において、同じように神位に対して祭文の朗読と拝礼を行う「恒祭」を実施したことから確認することができる。財団法人懐徳堂記念会が行った恒祭とは、毎年一回、「旧懐徳堂師儒諸先生」と「懐徳堂記念会物故諸先生並功労者」とを祭神とする祭典である。

12　財団法人懐徳堂記念会は大正三年（一九一四）三月五日、「懐徳堂教育ノ感化ヲ追念シ道徳学術ノ発達ヲ図ラムトスル計画」を有しているとして、下賜金二百円を受けている。このことは、財団法人懐徳堂記念会の活動が当時の教育行政の方針に合致するとの評価を受けたことを表していると推測される。但し、財団法人懐徳堂記念会の寄付行為には、「国民道徳ノ進歩ニ力メ学術ノ発達ヲ図リ本邦文化ノ向上ニ資スル」ことが会の目的とされているが、そこには儒教の振興は盛り込まれていない。

13　『懐徳堂記念会会務報告』における儒教重視や教育勅語重視の表現については、懐徳堂記念会・財団法人懐徳堂記念会の中心人物の一人であり、晩年宮内省御用掛となった西村天囚の意向が強く影響した可能性が考えられるが、この点についてはなお検討を要する。

追記：本稿は、二〇一〇年五月七日・八日に台湾大学で開催された、東アジア文化交渉学会第二回大会における発表「懐徳堂記念祭における儒礼」の発表原稿を基に、加筆修正を加えたものである。

（島根大学教育学部教授）